

資 料

eラーニングを用いた入学前学習が 入学後初年次の成績へ及ぼす影響

國弘保明^{*1} 大始良義将^{*2} 後藤大輔^{*1} 佐藤大介^{*1}
西脇藍^{*1} 門利知美^{*1} 福島康弘^{*1} 宮川健^{*1}

要 約

本研究では、川崎医療福祉大学で行われている e-learning 形式の入学前学習「K ラーニング」について、22年度・23年度の入学者の取り組みと、1年次終了時点 GPA を検討して考察した。入学前学習について学習時間等と GPA の相関は見られなかった。しかし、学習が進まず指導を行った学生群の GPA が低いことや、その学習スタイルの類型化については指摘することができた。今後、入学前学習を行う際には、早期から指導を行うこと、返答がない受講生に対する指導がアドミッション・ポリシーの面からも必要なこと、時間を費やしているが学習が進まず、問題の所在を認識できていない受講生に対する指導が必要である。

1. 緒言

本学では2020年度入学者から、e-learning 教材としての入学前学習「K ラーニング」を実施している。当初は一部学科の入学者を対象として開始したが、現在では全学科の総合型選抜試験合格者・学校推薦型選抜試験の合格者を対象に実施している。

また、e-learning 教材の実施に加えて、スクーリングも実施している。当初は e-learning 教材の説明会的要素が強いものだったが、コロナ禍における同時中継型スクーリングの実施を経て、現在は全学科の「K ラーニング」受講者を対象に、対面式のスクーリングを行っている。

これらの取り組みは学科教員の協力を得ながら、総合教育センターの教職員が主導してきたものである。受講生を対象とした事後アンケートを見れば、受講生の満足度は高い。だが、入学前学習 K ラーニングの実施は受講生や大学に資するものといえるのだろうか。大学は入学前の教育活動をどのように入学後にフィードバックできるのだろうか。本稿はこの問題意識を持って、これまでの活動を検討する。

2. 入学前学習の位置づけ

2.1 入学前学習の実施状況

大学の入学前学習とは、主に早期に入学が決定した入学予定者に対して、基礎学力確保や就学へのモチベーション維持の観点から実施される教育活動である。

ベネッセ教育総合研究所¹⁾の調査によれば、推薦入試・AO 入試いずれかの合格者に対して入学前教育を実施している大学は、全体の73.1%を占めている。この調査結果は2014年のものであることを考えれば、さらに広がりを見せていることが推測される。

同調査によれば、入学前教育のねらいは「入学までの学習習慣の維持」が76.3%、「高校までの基礎学力の補強・向上」が68.0%、「大学での学びへの動機づけ」が60.3%であった。学力とモチベーションの観点から、入学前学習が行われていることがわかる。

2.2 高大接続の観点

入学前学習は大学への入学予定者であるという観点から、高等学校在籍中の生徒を大学が教育する教育活動である。すなわち、「高大接続」の観点から捉える必要がある。文部科学省「高大接続改革実

*1 川崎医療福祉大学 総合教育センター

*2 川崎医療福祉大学 医療技術学部 臨床工学科

(連絡先) 國弘保明 〒701-0193 倉敷市松島288 川崎医療福祉大学

E-mail : kunihiro@mw.kawasaki-m.ac.jp

行プラン²⁾は、「高等学校教育、大学教育、大学入学選抜は相互に密接に関連し合うものであり、新しい時代にふさわしい高大接続の実現のためには一貫した取組が必要である」としている。

また、より具体的には、文部科学省は「『高大接続改革』に係る質問と回答(FAQ)」³⁾の中で、早期に合格が決定した後の学習意欲を継続する観点から、以下のような内容を促進することとしている。入学前学習 K ラーニングはこの(1)に位置づけられるだろう。

- (1) 特に12月以前の入学手続き者に対しては、入学前教育を「積極的に講ずる」こと。
- (2) 各高等学校においても、大学と連携し学習意欲を維持するための必要な指導を行うよう努めること。
- (3) 学校推薦型選抜の場合、合格決定後も、高等学校の指導の下に、高大連携した取組を行うことが望ましい。(例：入学予定者に対して大学入学までの学習計画を立てさせ、その取組状況等を高等学校を通じ大学に報告させる等。)

文部科学省は「令和7年度大学入学選抜実施要項について(通知)」⁴⁾においても「第13その他注意事項11その他」として次のように述べている。

各大学は、入学手続をとった者に対し、必要に応じ、これらの者の出身高等学校と協力しつつ、入学までに取り組むべき課題を課すなど、入学後の学修のための準備をあらかじめ講ずるよう努める。特に12月以前に入学手続をとった者に対しては、積極的に当該措置を講ずることとする。

また、学校推薦型選抜の場合、高等学校による推薦段階だけではなく、合格決定後も、推薦を行った

高等学校の指導の下に、例えば、入学予定者に対して大学入学までの学習計画を立てさせ、その取組状況等を、高等学校を通じ大学に報告させるなど、高大連携した取組を行うことが望ましい。

なお、当該措置を講じる場合は、その旨を募集要項に記述する。その際、アドミッション・ポリシーとの関連に留意する。

ここでは先に見た「入学前教育を『積極的に講ずる』こと」について、より具体的に「入学までに取り組むべき課題を課す」「入学後の学修のための準備をあらかじめ講ずる」とより詳細に記述されていることが確認できる。大学が入学までに取り組むべき課題と考える課題のひとつとして、K ラーニングは入学予定者に課されているのである。

3. 入学前学習 K ラーニングについて

3.1 概要

K ラーニングは、e-learning 形式で行われる入学前学習である。専願入試に合格した者に対しては必須の課題として扱い、併願合格者に対しては任意としている。

K ラーニングは2020年度入学者から実施されてきた。当初は対象とする学科が限定されていたが、22年度入学者からは全学科を対象としている。

科目は英語・数学・国語の3科目を必須とし、理科・社会の学習については学科の判断に委ねている。すべて選択式の問題である。これに加えて、医療福祉の学習を念頭に置いて数学・物理・化学・生物からエッセンスを抽出した教材「医療福祉基礎」を課している。

英語・数学・国語は各6分野に分かれている。途

K ラーニング概要図

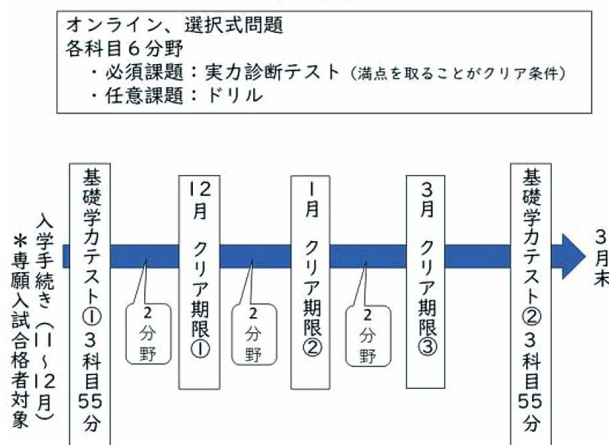


図1 K ラーニング概要図

中にクリア期限を3回設け、それぞれまでに2分野ずつ進むことを課した。また、最初と最後に3科目55分間の「基礎学力テスト」を課した（図1）。

3.2 Kラーニングに関するこれまでの議論について

これまでいくつかの観点から、入学前学習 Kラーニングについて考察を行ってきた。

國弘ら⁵⁾では、2022年度入学者を対象にして実施した、オンライン形式のスクーリングについて調査・分析しており、コロナ禍にあって行われたオンライン形式のスクーリングのアンケートでは、入学予定学科の教員や学生、あるいは入学予定者同士の交流を求める姿が明らかになった。

また、國弘ら^{†1)}は、2023年度入学者を対象にして実施した、対面型のスクーリングにおけるアンケートを分析しており、アンケートの自由記述で「不安」を吐露した学生は、1年次終了時点の GPA が高いことがわかった。GPA が振るわない学生は、入学前には不安を述べていないこともわかった。入学予定者の感じる不安は、大学入学後の講義の内容そのものではなく、学ぶスタイルの変化によることも示唆された。

さらに、國弘ら^{†2)}は、入学後の有リスク学生をスクリーニングする指標を考える試みとして、e-learning による入学前学習の受講状況と、入学後の成績について考察した。これによると、入学試験時の瞬間最大の学力よりも、入学前の学力が GPA に影響することが示唆され、学習習慣の重要性が想起された。また、低 GPA 群は入学前学習をクリアするまでにログイン回数がかさんでおり、集中力不足や学習ストラテジーの欠如によるものと考えられた。休学者は在学生に比べ、数学の課題をクリアするのに倍の回数を要していた。休学者は数学のドリル実施回数が極端に少ないことも明らかになり、苦手意識が顕著に表れる数学が、有リスク学生の指標になりうることが示唆された。

本稿では、これらを踏まえた上で、冒頭に示した問題意識のように、入学前学習 Kラーニングの実施は受講生や大学教育に資するものといえるか、いかにフィードバックできるかという観点から考察する。

4. 方法

4.1 対象者

2022年、ならびに2023年に本学に入学した学生のうち、Kラーニング受講者が対象者である。Kラーニング受講者は、総合型選抜（専願）・学校推薦型選抜前期（専願）の合格者である。学校推薦型選抜

後期（併願）の合格者にも Kラーニングは実施したが、併願合格者であるため学習については個人の判断に任せている。そのため、今回の研究対象からは除外している。

22年度入学者としての研究対象者は753名であり、23年度入学者としての研究対象者は733名、計1486名が対象者である。

4.2 検討したデータ

対象者の Kラーニング受講状況、とりわけ英語・数学・国語・医療福祉基礎の学習状況について、テストのクリア数、テストの実施回数、ドリルの実施回数、テストの所要時間、ドリルの所要時間、合計学習時間で見た。これに加えて、各クリア期限までに著しく課題に取り組めなかった者に対する学習勸奨状況も検討した。

大学入学後の学習状況をつかむデータとしては、1年次終了時点の GPA を検討した。GPA の得点幅は、22年度入学生、23年度入学者ともに0.0から3.8であった。

5. 結果

5.1 GPA との相関

Kラーニングの学習状況と GPA の関係を、ピアソンの積率相関係数を用いて検討した。有意水準は5%とした。

GPA と Kラーニングのログイン回数に、相関は見られなかった ($r=0.024$)。

GPA とテストのクリア回数は、英語 ($r=0.234$) と数学 ($r=0.209$) については弱い相関が見られたものの、国語 ($r=0.143$) について相関は見られなかった。

GPA とテストの実施回数は、英語 ($r=0.002$) ・数学 ($r=-0.068$) ・国語 ($r=-0.105$) ととも相関は見られなかった。

GPA とドリルの実施回数は、英語 ($r=0.148$) ・数学 ($r=-0.127$) ・国語 ($r=-0.121$) ととも相関は見られなかった。

GPA と学習時間については、テスト実施時間 ($r=-0.090$) ・ドリル実施時間 ($r=0.068$) ととも相関は見られなかった。

5.2 学習指導

2.1 で見たように、入学前学習は「入学までの学習習慣の維持」を最大の目的として実施されている。本学で実施している Kラーニングも、学習習慣の形成を第一に標榜している。形成的な指導として Kラーニングを見た場合にはどうだろうか。

Kラーニングでは学習スケジュールとして3回の「クリア期限」を設け、それに合わせて指導を行っ

ている。22年度入学者・23年度入学者に対する指導を以下に示す。

5.2.1 22年度入学者に対する指導

22年度はコロナ禍であったため、スクーリングをオンラインライブ配信で11月と12月に実施した。繰り返しの視聴ができるようにもした。

その後、12月末にクリア期限①を迎えた。ここで、以下のように優先度を設け、学習状況と連絡先のデータとともに、入学予定学科の教員に指導を依頼した。優先度1に該当する4名の受講生に対しては「強めの指導」をお願いした。

優先度1：K ラーニングの実力診断テストをひとつもクリアしていない受講生

優先度2：オリジナル課題である「医療福祉基礎」にまったく手が着いていない受講生

優先度3：期限までに求めた課題が未達成の受講生

こうして1月末を迎えたクリア期限②であったが、英語・数学・国語のテストをひとつもクリアしていない受講生が33名残った。クリア期限①後の「強めの指導」で状況が改善した受講生は4名中2名に留まった。そこで、入学予定学科の教員に改めて指導を依頼した。

なお、22年度の指導対象者の1年次終了時点のGPAは平均値・中央値とも2.1であった。最高値が3.6、最低値が0.0^{†3)}と幅が広いことに留意する必要がある。

5.2.2 「参加しない、返答しない」受講生

クリア期限②までになんらかの指導を行った35名（以下、22年度の指導対象者）について、分析する。端的に言えば、参加しない、もしくは返答しない傾向が強い。

22年度入学者に対してはオンライン形式のスクーリングを実施した。これは開催形態の都合上、誰が参加をしたのかをつぶさに把握することはできなかったが、開催後、受験番号を書かせる形式でアンケート調査を実施した。第1回のスクーリングは最

大同時参加人数が286人、第2回は167人であり、事後のアンケート回答数は第1回が200件、第2回が129件であった。厳密なものにはならないが、回答率は第1回が69.9%、第2回が77.7%程度であったと推測される。

ところが、22年度の指導対象者は35名中7名（20.0%）しか回答していない。これはオンラインスクーリングに参加していない可能性や、参加はしたがアンケートに回答していない可能性もあり、「参加しない、返答しない」特徴が示唆できると考えられる。

クリア期限②の結果は保護者宅に郵送したが、22年度の指導対象者から改善が見られた2名を除いた33名に対しては、連絡をするよう、学習を進めなかった理由を説明するよう、文書で求めた。これに応じた者は33名中15名、応答率は45.4%にとどまり、返答の求めにも応じない傾向が見られた。期限までに取り組みなかった理由を表に示す（表1）。

3月にはK ラーニング全体を総括するアンケートを実施した。22年度の指導対象者のこれに対する回答は35名中18件、回答率は51.4%だった。全体の回答率が67.7%であったことを考えると、低さが目立つ。

コロナ禍にあって、22年度入学者に対して、入学前学習では対面する機会がなかった。まだ本学に入学していない「参加しない、返答しない」受講生に対する指導の難しさを実感するものとなった。

5.2.3 23年度入学者に対する指導

対面型スクーリングを経て、12月末にクリア期限①を迎え、指導の優先度を設定して、学科の教員に指導を依頼したことは同様である。ただし、優先度1の設定を変更した。

優先度1：K ラーニングの実力診断テストをひとつもクリアしていない受講生

優先度2：オリジナル課題である「医療福祉基礎」にまったく手が着いていない受講生

優先度3：期限までに求めた課題が未達成の受講

表1 22年度クリア期限② 期限までに取り組みなかった理由

	(名)
クリア条件を理解せず	6
「医療福祉基礎」のみと誤解	4
操作方法がわからず	1
忘れていた	1
パスワードを忘れ、ログインできず	1
取り組んでいると受講者は反論するも、実際には手つかず	1
理由不明瞭	1

生

求めた課題を期日までに達成できていないという時点で、当然指導は行われるべきであるが、まだ入学していない受講生に連絡をすることは教員にとっても負担が大きい。そのため、優先度を付け、可能な限りの指導を依頼した。とりわけ「優先度1」の受講生に対しては、基礎学力徹底のためにK ラーニングに取り組むべきことを強く指導してほしいこと、指導にもかかわらず学習が進まない場合には受講生に電話をかけて指導することも視野に入れてほしいことを依頼した。

この「優先度1」の受講生は23年度の場合20名（以下、23年度の指導対象者）であり、学科別で見れば0名から4名存在した。23年度の指導対象者の1年次終了時点のGPAは平均値・中央値とも2.2であった。最高値は3.0、最低値は1.0であった。

これらの、入学前から教員によって「強めの指導」を受けた受講生はK ラーニングの受講をどのように進めたのか。以下、類型化して具体的に検討する。

（1）修正達成型

教員による「強めの指導」が奏功して、学習が順調に進んでいるタイプ（1名）である（表2）。クリア期限②には求められた課題が達成できており、追加の指導を必要としなかった。ただ、このように順調に軌道修正できたのは1名のみであり、指導の難しさがわかる。

（2）追い込み達成型

クリア期限②までは順調に学習が進んだとは言えず、再指導を受けている者もいるが、最終のクリア期限③には間に合わせたタイプ（8名）である（表3）。識別番号23A や23M が典型例である。先述の通り、クリア期限②では学習が進められていないため、入

表2 23年度 修正達成型

識別番号	ログイン回数	数学クリア数	国語クリア数	英語クリア数	学習時間
23P	クリア期限①まで	9	0	0	0 1:04:02
	クリア期限②まで	9	4	5	4 19:56:51
	クリア期限③まで	64	6	6	6 26:26:13

表3 23年度 追い込み達成型

識別番号	ログイン回数	数学クリア数	国語クリア数	英語クリア数	学習時間
23S	クリア期限①まで	5	0	0	0 0:15:38
	クリア期限②まで	8	2	0	0 1:10:38
	クリア期限③まで	24	6	6	6 8:20:57
23N	クリア期限①まで	5	0	0	0 0:00:00
	クリア期限②まで	17	2	5	2 5:19:43
	クリア期限③まで	32	6	6	6 10:50:05
23I	クリア期限①まで	15	0	0	0 1:02:28
	クリア期限②まで	18	0	1	0 1:37:09
	クリア期限③まで	44	6	6	6 15:30:57
23R	クリア期限①まで	6	0	0	0 0:00:00
	クリア期限②まで	12	4	4	0 3:15:54
	クリア期限③まで	23	6	6	6 15:57:12
23Q*	クリア期限①まで	1	0	0	0 0:00:00
	クリア期限②まで	2	0	0	0 0:50:40
	クリア期限③まで	25	6	6	6 16:32:55
23K	クリア期限①まで	3	0	0	0 0:17:26
	クリア期限②まで	6	0	1	0 1:09:30
	クリア期限③まで	21	6	6	6 19:28:21
23A*	クリア期限①まで	0	0	0	0 0:00:00
	クリア期限②まで	2	0	0	0 0:00:00
	クリア期限③まで	42	6	6	6 20:29:55
23M*	クリア期限①まで	0	0	0	0 0:00:00
	クリア期限②まで	0	0	0	0 0:00:00
	クリア期限③まで	58	6	6	6 20:36:08

*はクリア期限②にも指導を受けた受講生を示す。

学前学習の進行中は、後述する「手つかず未達成型」と区別が付かない。このタイプに該当する学生の1年次終了時点 GPA の平均値は2.2, 中央値は2.3, 最高値は2.8, 最低値は1.5であった。

(3) 手つかず未達成型

「追い込み達成型」同様、クリア期限②まで学習が進まず、結局手につかないまま最後を迎えてしまったタイプ(8名)である(表4)。全員がクリア期限②の際に、再指導を受けている。先述の通り、「追い込み達成型」との識別は難しい。

23年度の指導対象者を1年次終了時点 GPA で並

べた場合、2.5までの比較的高値を得ている6名のうち4名がこのタイプに属している(他2名は追い込み達成型)。そしてこの4名のうち3名はKラーニングを総括するアンケートに回答していない。臆測に過ぎないが、Kラーニングの課題が容易すぎて興味を失っている可能性も否定できない。回答を寄せた1名は自由記述で「ピアノが家に今ない状態でピアノの練習をするように宿題を出されていたのですがあまり手がつけていなくて、それがすごく心配です」^{†4)}(ママ)と回答しており、自分の学習を自分でモニターできていることを示している。

表4 23年度 手つかず未達成型

識別番号		ログイン回数	数学クリア数	国語クリア数	英語クリア数	学習時間
23G*	クリア期限①まで	9	0	0	0	0:06:54
	クリア期限②まで	9	0	0	0	0:06:54
	クリア期限③まで	11	0	0	0	0:21:01
23D*	クリア期限①まで	3	0	0	0	0:01:02
	クリア期限②まで	3	0	0	0	0:01:02
	クリア期限③まで	5	0	1	0	0:39:40
23C*	クリア期限①まで	0	0	0	0	0:00:00
	クリア期限②まで	0	0	0	0	0:00:00
	クリア期限③まで	18	0	4	1	1:22:25
23E*	クリア期限①まで	9	0	0	0	1:48:18
	クリア期限②まで	11	0	0	0	1:48:18
	クリア期限③まで	18	0	0	0	1:48:39
23F*	クリア期限①まで	6	0	0	0	0:10:57
	クリア期限②まで	8	0	0	0	0:14:15
	クリア期限③まで	13	0	0	0	1:56:09
23B*	クリア期限①まで	0	0	0	0	0:00:00
	クリア期限②まで	0	0	0	0	0:00:00
	クリア期限③まで	2	0	2	0	2:09:35
23J*	クリア期限①まで	0	0	0	0	0:26:28
	クリア期限②まで	9	0	0	0	1:18:11
	クリア期限③まで	20	0	0	0	2:31:02
23T*	クリア期限①まで	11	0	0	0	0:17:48
	クリア期限②まで	12	0	0	0	0:39:57
	クリア期限③まで	23	0	2	0	3:26:58

*はクリア期限②にも指導を受けた受講生を示す。

表5 23年度 長時間・未達成型

識別番号		ログイン回数	数学クリア数	国語クリア数	英語クリア数	学習時間
230	クリア期限①まで	1	0	0	0	0:00:00
	クリア期限②まで	5	1	6	0	2:06:53
	クリア期限③まで	22	2	6	2	6:07:29
23H	クリア期限①まで	4	0	0	0	0:02:39
	クリア期限②まで	15	0	0	0	0:13:14
	クリア期限③まで	48	1	6	1	12:32:27
23L	クリア期限①まで	25	0	0	0	8:05:13
	クリア期限②まで	30	0	0	0	11:14:45
	クリア期限③まで	41	0	0	0	17:07:11

*はクリア期限②にも指導を受けた受講生を示す。

このタイプに該当する学生の1年次終了時点 GPA の平均値は2.3, 中央値は2.5, 最高値は3.0, 最低値は1.6であった。

(4) 長時間・未達成型

学習に時間はかけたもののクリアできなかったタイプ(3名)である(表5)。このタイプに該当する学生の1年次終了時点の平均 GPA は1.7と、他のタイプに比べて明らかに低いことが目を引く。詳細に見ると、うち2名の学生は取得単位数自体に大きな変化はないものの、春学期に比べて秋学期の GPA が半分以下に落ち込んでいる。もう1名は秋学期に休学している。

特徴として、識別番号23O や23H の学習結果を見ると、国語のクリア回数が他に比べて突出していることがわかる。これは国語の問題が漢字や表現といった知識を問う問題で構成されており、調べればわかることが影響しているように思われる。それに対して、わからない内容を調べるためにも基礎知識が必要とされる数学や英語には手が付きにくかったのではないかと、K ラーニングを総括するアンケートで23H は「数学や英語といった私が特に苦手としている教科の K ラーニングでは100点を取ることが私の中ではとても難しく終わらないという不安と焦りがあります」と自由記述に回答し、その一端を裏付けている。

また、時間のかけ方が異なることもわかる。23L はクリア期限①の段階から多くの学習時間を使っている。今回の対象者におけるクリア期限①までのテスト学習時間の平均は6時間48分8秒であり、これを上回っている。それに対して、23O や23H は「追い込み達成型」に近い時間の使い方をしているが、結果として課題をクリアできずに終わってしまっている。

5.2.4 23年度の指導対象者の参加と返答

スクーリングにおける23年度の指導対象者の出席率は65.0% だった。これは入学者全体の出席率が71.0% であるのに比べ、やや低い。また、23年度の入学者を対象とするスクーリングは対面形式で実施したため事後アンケートの回答率が99.0% と高かったのだが、未解答者が4名おり、そのうちの2名は23年度の指導対象者だった。

また、3月に実施した K ラーニング全体を総括するアンケートに対して、23年度の指導対象者は20名中12件、回答率は60.0% だった。全体の回答率が73.9% であったことを考えると、低い結果となった。

6. 提言

23年度入学者の場合、「強めの指導」を行っても

すぐに学習活動が改善される「修正達成型」は1名しかいなかった。残念ながら、指導が難しいことを裏付ける結果となっている。

ただ、22年度・23年度とも、指導対象者は1年次終了時点 GPA が振るわない。つまり、指導が必要な層の一部は捕捉できていることになる。入学前学習の今後の受講生指導について、今回の結果から、以下のような提言が導けるのではないだろうか。

6.1 早期段階での指導

高大接続について喧伝されるように、高等学校までの学びと大学における学びは異なる。隅谷⁶⁾は大学での学びが受け身であっては「授業には出るけれども勉強しない」と指摘し、川嶋⁷⁾は高校と大学の場所の違いについて触れ、「大学に入学後、大学生生活にうまく適応できないことが多い」ことを指摘している。

このような観点から、まずは自分の学習を自分で管理することの必要性を知り、それができるように指導することが必要になるだろう。入学前学習ではその第一歩として、課題を締め切りまでに終わらせることについて重要性を認識させることが欠かせない。そのためには23年度入学者を対象にクリア期限①で実施したように、課題をクリアできていない受講生については早い段階で学習を勧奨することが求められる。

6.2 返答のない受講生への指導

前節に関連して述べれば、指導をして返答がない受講生に対するさらなる指導も必要であると思われる。本学が医療福祉系大学であることを考えればなおさらである。2.2 で見たように、文部科学省⁴⁾は入学前学習とアドミッション・ポリシーの整合性を指摘している。本学のアドミッション・ポリシー⁸⁾のなかには「他者の言葉に耳を傾け、適切に説明できるというコミュニケーション能力を持つために努力する人」「他の医療福祉人と連携して働くために、チームワークの能力を備えている人」という一節もある。コミュニケーションが取れず、チームワークに課題がある受講生に対しては本学入学を前提とする以上、指導が必要ではないだろうか。

一方で、返答がない受講生を返答が来るまで指導することには大変な労力がかかることを、入学前学習担当者はこの5年間の K ラーニングの実施を通じて経験的に知っている。本件は時間や労力との兼ね合いで進めなければならないだろう。

6.3 「長時間・未達成型」の早期発見と指導

早期段階での指導は注意喚起として欠かせない。一方で、6.2.3 の(2)で見たように締め切り直前まで学習を始めない受講生もいる。また、6.2.3

の(3)で見たように繰り返し指導を受けても学習に手をつけない受講生もいる。入学前学習の時期は入学を受け入れるための準備を進める期間でもあるが、大学の在学生、特に4年生に対する指導では国家試験の追い込み期でもある。度重なる受講生指導は教員の負担増ともなる。

そこで、指導対象を「長時間・未達成型」に限定することを提言したい。6.2.3の(4)で識別番号23Lを見たように、平均的な学習時間あるいはそれ以上を費やしながら、他の受講生に比べてクリア回数が伸びない受講生が存在する。

このような学生を捕捉し指導するにあたっては、受講生が抱えている状況を指導者側が発見し、その問題点を提示する必要があるように思う。実際に、識別番号23Lの受講生は入学前のスクーリングに参加し、アンケートに回答もしているが、特に困難を感じているような形跡は見られない(自由記述欄に「教員の皆様が丁寧に教えて下さり、とてもわかりやすい講義で良かったです！入学後のことについても詳しく教えて頂いたので、心配が減りました。」と記述しているが、これだけでは「心配」がどのようなものかはわからない)。また、同受講生は学習を総括するアンケートに対して、学習項目の難易度を全教科「ちょうどよい」と回答していて、これだけでは学習に17時間を費やしながらも、ひとつも

課題をクリアできていない原因はわからない。アンケートは参考にしつつも、学習時間とクリア回数の観点から、指導者側が受講生の学習状況をモニターし、必要に応じて受講生の抱えている困難について尋ね、対処する必要があるだろう。

7. 結語

本研究では、川崎医療福祉大学で2020年度入学から行われている e-learning 形式の入学前学習「Kラーニング」について、22年度・23年度の入学者の取り組みと、1年次終了時点 GPA を検討して考察した。入学前学習について学習時間等と GPA の相関は見られなかった。しかし、学習が進まず指導を行った学生群の GPA が低いことや、その学習スタイルの類型化については指摘することができた。その上で、今後 K ラーニングを行う上で、受講生をいかに指導すべきか提言を行った。

入学前学習は基礎学力の向上と学習習慣の維持を目的に行われているが、入学への期待を喚起し、愛校心を育む格好の機会でもある。入学前の受講生の指導は、時として教員に負担感を抱かせるが、入学後、スムーズに学びを始めるために欠くべからざるものである。今後も本学への入学予定者に資する入学前指導を行っていきたい。

倫理的配慮

本研究は川崎医療福祉大学倫理委員会の承認を得て行われた。(承認番号:21-076)

謝 辞

本研究は川崎医療福祉大学令和4年度医療福祉研究費の助成を受けた。記して謝意を表する。

注

- †1) 2023年9月4日に開催された日本リメディアル教育学会北海道支部大会にて、以下の要領で発表を行った。
國弘保明, 大始良義将, 後藤大輔, 佐藤大介, 西脇藍, 福井夕希子, 門利知美, 福島康弘, 宮川健:入学前スクーリングの実施後アンケート分析. <http://www.jade-web.org/hokkaido/2023年度北海道支部大会プログラム/>.
- †2) 2023年11月28日に開催された川崎医療福祉大学第39回医療福祉研究報告会にて、以下の要領で発表を行った。
國弘保明: K ラーニング受講者の受講状況と、入学時春学期の成績の関係. https://w.kawasaki-m.ac.jp/info/research_welfare_result/.
- †3) この学生を含め下位5名は中途退学している。執筆時点で在籍している学生の最小値は13である。
- †4) ここでの「ピアノの練習」とは、K ラーニングと並行して課されている学科独自の入学前学習のことである。

文 献

- 1) ベネッセ教育総合研究所: 高大接続に関する調査.
https://benesse.jp/berd/koutou/research/detail_4338.html, 2014. (2024.9.1確認)
- 2) 文部科学省: 高大接続改革実行プラン.
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo12/sonota/_icsFiles/afieldfile/2015/01/23/1354545.pdf, 2015. (2024.9.1確認)

- 3) 文部科学省：「高大接続改革」に係る質問と回答（FAQ）.
https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/koudai/detail/1404473.htm, [2012]. (2024.9.1確認)
- 4) 文部科学省：令和7年度大学入学選抜実施要項について（通知）.
https://www.mext.go.jp/content/20240605-mxt_daigakuc02-100001251-1.pdf, 2024. (2024.9.1確認)
- 5) 國弘保明, 大始良義将, 西脇藍, 福井夕希子, 門利知美, 福島康弘, 宮川健：入学前学習における, 同時中継型スクーリングの実施とその効果. 川崎医療福祉学会誌, 32(2), 483-490, 2023.
- 6) 隅谷三喜男：大学で何を学ぶか. 岩波書店, 東京, 1981.
- 7) 川嶋太津夫：高大接続と初年次教育. 初年次教育学会編, 初年次教育の現状と未来, 世界思想社, 京都, 55-66, 2013.
- 8) 川崎医療福祉大学：入学者の受け入れ方針（アドミッション・ポリシー）〔学部〕.
<https://w.kawasaki-m.ac.jp/exam/admissionspolicy/>, [2017]. (2024.9.1確認)

(2024年11月6日受理)

The Impact of Pre-Enrollment Learning Using E-Learning on Academic Performance in the First Year of University

Yasuaki KUNIHIRO, Yoshimasa OAIRA, Daisuke GOTOH, Daisuke SATOH, Ai NISHIWAKI,
Tomomi MONRI, Yasuhiro FUKUSHIMA and Takeshi MIYAKAWA

(Accepted Nov. 6, 2024)

Key words : high school students, pre-enrollment learning, GPA, learning style, admissions policy

Abstract

In this study, we examined the pre-enrollment e-learning program “K-Learning” implemented at Kawasaki University of Medical Welfare. We focused on the engagement of students enrolled in the 2022 and 2023 academic years, as well as their GPA at the end of the first year. While no correlation was found between time spent studying and their GPA for the pre-enrollment learning, it was noted that students who required guidance due to a lack of progress had lower GPAs. In addition, the study highlighted the categorization of learning styles among these students. Going forward, it is important to provide early guidance during the pre-enrollment learning period. Furthermore, from an admissions policy perspective, it is necessary to communicate with students who do not respond to guidance, and to provide support for students who do not make progress despite the time they devote to their studies, or who are unable to recognize where the problem lies.

Correspondence to : Yasuaki KUNIHIRO

Comprehensive Education Center

Kawasaki University of Medical Welfare

288 Matsushima, Kurashiki, 701-0193, Japan

E-mail : kunihiro@mw.kawasaki-m.ac.jp

(Kawasaki Medical Welfare Journal Vol.34, No.2, 2025 283 – 291)